書評

大屋幸世著『森鷗外　研究と資料』

山崎一穎

大屋幸世氏の『森鷗外　研究と資料』（一九九九年五月二八日　翰林書房）は、氏の三冊目の研究書である。本書は次の様な構成となっている。

前書きにかえて――鷗外、その〈悲哀〉について

研究編

森鷗外の「日本食論」――『非日本食論ハ将ニ其根拠ヲ失ハントス』を読む――

〈末流文壇〉という状況――「雲中語」の世界――

『即興詩人』――影響史の構図――

『うた日記』管見――〈無言〉の越境――

『うた日記』管見――雲を見る眼――

詩「海のをみな」をめぐって――鷗外〈文壇再活時代〉への一視座――

『キタ・セクスアリス』論――〈制度〉としての〈性〉――

「蛇」を読む――〈混沌〉の世界――

『諸国物語』の一景――『灰燼』の基底のひとつとして――

資料編

鷗外の文庫本

「キタ・セクスアリス」をめぐる森鷗外日記諸註

神保文輔のこと――「灰燼」外伝――

全集未収録書簡とその周辺

書評一束

あとがき

大屋氏は「前書きにかえて」に於いて、木下杢太郎が鷗外文学を評した「悲哀に似る一種の気分」を引き、「何の故か」と問う。さらに高橋義孝氏の「森鷗外とともに事実上何かが終つたと私は思ふ」を引用し、その言説中の「何か」を問う。鷗外の小説「棧橋」「舞姫」「妄想」に触れつつ、「〈何か〉の〈何〉は明治と寄り添って来た鷗外の、深い空虚感であったのかもしれない」と言う。そして、「〈悲哀〉を発条とした、無限と言ってもよい距離のある遠方へ」の「まなざし」を鷗外の姿勢と見ている。

本書収録の研究論文は、「何故か」「何か」を問いつつ、鷗外の「空虚感」、「まなざし」を解明することに努めている。

森鷗外の「日本食論」――『非日本食論ハ将ニ其根拠ヲ失ハントス』を読む――は、「鷗外が栄養問題・食糧問題を一国の社会・経済問題としてとらえている」と総括する。納得できる論理である。そして大屋氏は「せわしなかった日本の近代化」にあって、「一方では帰納的方法は捨て、ときに演繹的な上から下へといった啓蒙的な姿勢を、鷗外はとらざるをえなかったのではないか。私が冒頭で述べた鷗外の姿勢の一端はここにかかわって来る」と結んでいる。

「鷗外の姿勢の一端」と言うとき、大屋氏の言い廻しが欠足し

ていて、やや物足りない。「前書きにかえて」と対照して読んでも、上から下への啓蒙活動故に〈悲哀〉感が生じたと言いたいのか、啓蒙家と被啓蒙家との〈距離〉がある故に〈悲哀〉が生じたのか、わかりずらい。私は上からの啓蒙は、西欧を見て来た知識人のプライドと責務の心が根底にあるのではないかと考えている。鷗外の微細なる心にかかずらう大屋氏の姿勢こそ、〈何故〉〈何か〉を追求する大屋氏の感性である。本書はこの感性で貫かれており、そこに大屋氏の鷗外を捉える視点がある。

〈末流文壇〉という現況――「雲中語」の世界――は、「雲中語」から明治三十年代当初の小説世界を問題とする。「雲中語」の評者たちが、「僻作、悪作、愚作」と評した作品を大屋氏は検討する。そして「悪作批判が正当なものかどうか」を検証するのが、本論の眼目である。ストーリーのリアリティの欠如から、〈末流文壇〉の状況を明らかにする。問題設定から論証方法も納得できる。文末に「〈末流文壇〉と言うことは易い。しかし、文体の獲得という点に関してみると、問題はそうたやすいことではなくなる」と記す。「雲中語」の評者たちの文体意識と実作者のそれとの差異をもう少し明瞭にしてほしかった。

『即興詩人』――影響史の構図――は、よくまとまっている。島田謹二氏の考察の延長線上に浜田青陵氏を位置付ける。青陵氏の『南欧游記』における『即興詩人』の影響を取り上げて説得力がある。

『うた日記』管見――〈無言〉の越境――では、大屋氏は日露戦争讃歌集とも言うべき『山桜集』と『うた日記』と並置させる。そのことで『うた日記』の位置を明確にする。大屋氏は『うた日記』中から「ほりのうち」を取り上げる。負傷した無名の日本兵士が、戦闘の様を問う上司にも家族にも無言で押し通す心を謳っている。そして死を前にしたロシア兵が、なつかしき父母や妻子を語る「ぷろしゆちやい」(注記〈さようなら〉の意)を取り上げる。大屋氏は「ほりのうち」の兵士の二重の〈無言〉が「ぷろしゆちやい」の饒舌へと越境する様を分析する。ここまでの分析には説得力がある。しかしこの越境を大屋氏は「詩人として書き余ったもの」と言う。私はその事を否定しない。書き余った心を論理化するのは難かしい。私はむしろ大屋氏が「前書きにかえて」で述べている鷗外のまなざしの距離で論述する方が、書き余った心を論理化できるのではないかと考えている。

『うた日記』管見――雲を見る眼――は、発表当時から評価の高い論考である。大屋氏は奉天作の〈雲〉五首の検討を通して、「鷗外は国家・制度というものとの緊密な同一性から脱落する意識があったのではないか」と言い、「鷗外の感性のある状態、上に向かっては〈地上〉からの剝離感、下にあっては深い虚無感」を見て取っている。鷗外の心性を見事に捉えている。

詩「海のをみな」をめぐって――鷗外〈文壇再活躍時代〉への一視座――に於いて、「海のをみな」は〈我〉と〈海のをみな〉の争いの様相が象徴詩風に謳われている。裸身のをみなに左手を取られ、右手の剣を揮ふ心もなきままに、裸女の群にからめ取られ、「引かれまい」と思いつつ、海のいずくかに「引かれて行く」心を形象している。

大屋氏は鷗外の現実認識を「引かれじとのみぞ」の表現に鷗外の「強固な自己還帰の意志」を見、「髪は空ざまに／立ち、肌粟立つ」の評言に「鷗外の現実に対する恐怖心」を見、この「正反の複雑な力学」関係に見ている。そして「〈女子〉〈状況〉と〈剣〉〈言葉〉とを二つながらに意識しつつの、〈現代〉という〈海〉へ歩行」していったと見る。

私はこの詩を裸身の乙女に象徴される官能と見ているので「引かれじとのみぞ」が大屋氏の言う「強固な自己還帰の意志」という表現がよくわからない。大屋氏は「海のをみな」を小説「半日」と接続させて見ているので、『うた日記』管見で見られたような感性が押えられ、理に勝ち過ぎているように思われる。

『キタ・セクスアリス』論――〈制度〉としての性――で、大屋氏は〈僕〉の恋愛観、性欲観は「名」〈書物〉が先行し、観念的な恋や抽象的な性となっていることを述べる。それ故に、恋や性が純粋化、理想化の形を取るため、「キタ・セクスアリス」の世界は、「〈性〉を〈聖〉化し、時に排他的に、あるいは排除的にもするのだ。〈中略〉時代の求めた〈制度〉的性の世界」であると結論付けている。首肯できる見解である。

なお、「資料篇」の「キタ・セクスアリス」をめぐる森鷗外日記諸註は、小説執筆――「スバル」掲載――発禁処分――内務省――陸軍省――鷗外〈戒飭〉という回路を明らかにしている。調査が行き届いている。

「蛇」を読む――〈混沌〉の世界――では、「蛇」は嫁と姑との対立、あるいは嫁のお豊をひとつの象徴とする現代女性問題として読まれてきた。大屋氏は一応それを認めつつも疑問を呈し、お豊の夫、穂積千足に視点を定めて読み直しを試みたのが本論である。

大屋氏は確固たる人生観、思想を持たない千足は妻の狂気からそれほど遠い所にいるのではないと看破する。その上でお豊に視点を移し、〈オオソリチイ〉を否定するお豊と〈生活の基礎となるやうな思想〉を欠く夫の千足を大屋氏は「時代の鏡の表と裏の関係」と見る。そして「近世から近代への過程で崩壊してしまった家の、ある混沌とした状況」のみが依然として無解決のまま放置されていると指摘する。

論理の展開も納得できる。しかし、大屋氏が「〈千足〉〈お豊〉という名に象徴されるような物質的な豊かさと、〈生活の基礎となるような思想〉の欠如ということにまさに、〈明治の初年〉生まれの〈近代〉の人間の抱えこまなければならなかった矛盾」があるという時、その「矛盾」の内実の掘り下げが必要であり、また先に引用した「時代の鏡」も、今少し「時代」の状況を明らかにしてほしかった。

『諸国物語』の一景――『灰燼』の基底のひとつとして――で大屋氏は『諸国物語』所収の「アンドレアス・タアマイエルが遺書」を手掛りとして、そこに〈不条理〉な世界を読み取る。氏が『諸国物語』の世界に拘泥するのは、『灰燼』の山口節蔵を通して鷗外の心性を捉えることを目論んでいるからである。大屋氏は節蔵を「人間の不条理さからくる愚かしさを見つくし、また不条理さの持つ人間の不可解さを諦観している」と把握し、そのような人

間の姿を描いた作は『諸国物語』に散在していると見ている。そして本論では『諸国物語』の「不条理性」「多義性」を作品から帰納し、「翻訳を他者を借りた作家の創作という目で見れば、鷗外文学は実に重層的」であると述べている。論理展開に説得力があって納得できる。『灰燼』の周辺を着実に領略してきた氏に『灰燼』論を期待してやまない。

資料篇の「鷗外の文庫本」は、鷗外作品の受容史を考える上で貴重な資料である。また全集未収録書簡の発掘もありがたい。

鷗外は軍医として官界に身を置きつつ、作家活動を続けて来た。それ故に鷗外文学の全貌を把握するのはなか〳〵困難である。巨視的に微視的に、その往還の間に捉えることが肝要である。言うは易く、行うは難い。大屋氏は二生を生きる鷗外の心のはざまに注目し、そのひだを小説テクストから行きつ戻りつしながら読む。それ故に鷗外研究者たちが見落している微細なるものに注目し、それを読み解いていく所に大屋氏の感性が働いている。その大屋氏の特質が本書では生きている。

（一九九九・五　翰林書房　四六判　二五四頁　二八〇〇円）

新刊紹介

小笠原幹夫著
『文学近代化の諸相Ⅳ―「明治」をつくった人々―』

本書は日本の近代化の鍵を握った諸人物に焦点を当てながら、「明治」という時代を多角的に考証した十二の論文によって構成されている。

第Ⅰ章では、明治維新時における徳川幕府の内実を再検討し、さらに福沢諭吉の言説を分析することで、明治維新と日本の近代化の意義を確認する作業がなされている。

第Ⅱ章には、坂本龍馬を維新の英雄として創出した坂崎紫瀾『汗血千里駒』の分析に始まり、「景山英子と大坂事件」「自由民権運動の虚像と実像」といった明治二・三十年代の社会像をめぐる論文が収められている。

以上を受ける形で、第Ⅲ章では、「自由民権運動と芸能・演劇」他の諸論文において、芸能・演劇の近代化に関する考察が付加されている。

（一九九九・三　高文堂出版社　A5判　一七六頁　二一九〇円）　〔山本亮介〕

斉藤英雄著
『山頭火・虚子・文人俳句』

著者には夏目漱石についての研究書があり、その「漱石への興味から派生した感のある」数編の論考が本書である。

第一部第二部は漱石同様、〈阿蘇〉を訪れた山頭火と虚子についての論である。山頭火と井泉水の〈阿蘇〉行がなされたのは何年何月何日か、その実状はどうだったか、また「まつたく雲がない笠をぬぎ」の句の制作に関する阿蘇説と宮崎説の検討、そして虚子の〈阿蘇〉における「芋水車」「大観峰」「龍膽」の各句の評釈等、各部において実証的な考察がなされる。

著者はまた、漱石のように小説と俳句の両方に関係する作家にも関心を寄せ、第三部「文人俳句」ではそうした現代作家である眉村卓、藤沢周平、結城昌治を選びそのそれぞれについて、SFと俳句、時代小説と俳句、推理小説と俳句の影響関係が探求される。所謂大衆作家として著名な彼等のまた違った一面が紹介され興味深い。

（一九九九・九　おうふう　B6判　二五四頁　二五〇〇円）　〔名木橋忠大〕